

2024年3月5日

愛媛県議会
議長 高山康人 様

請願人

松山市中央2丁目23-1 平岡ビル201
伊方原発をとめる会 事務局長 須藤昭男

紹介議員

菅 森実 石川 稔 檜垣良太
武井多佳子 田中克彦

(本通は本人署名による。順番は記載順)

能登半島地震は原発の危険を鮮明にしており、 伊方3号機の運転停止と廃炉を求める請願

【請願の趣旨】

1月1日16時10分頃に発生した能登半島地震は、原発の危険性を鮮明にしました。

志賀原発は、1、2号機ともに停止状態でしたが、核燃料の冷却に使われる外部電源3系統のうち2系統の変圧器などに破壊が及び、うち最大の500kV系統は途絶しました。また、原発への津波も3mの高さに及んでいました。国の地震調査研究推進本部（推本）は、今回の地震をマグニチュード7.6、震源の深さ16kmの地殻内地震とし、「北西―南東方向に圧力軸をもつ逆断層型」と発表しました。最大震度は7で、死者は多数の圧死者をはじめ241人（2024/2/7時点）にものぼります。

能登半島の、原発事故を想定した避難道路は寸断され、「屋内退避」のできない現実もあらわになりました。「放射線防護施設」は全ての施設で断水し、気密性を保てない施設も相次ぎました。震源が原発から70kmほど離れていたこと、顕著な地盤隆起が原発の北10kmあたりまでであったことなど、まさに「偶然」によって最悪結果を回避できたと言わねばなりません。重大事故に至っていたら、避難が出来ず、被ばくの広がる桁違いに深刻な事態が懸念されました。

伊方原発は、北6kmには中央構造線活断層帯があり、直下には南海トラフの震源域があり、二重の脅威にさらされています。原発前面の中央構造線が活断層だと明らかにした岡村眞さん（高知大学名誉教授）は「右横ずれ断層を主成分としながらも逆断層成分を含む」と指摘しており、「逆断層」の危険性という点でも能登半島地震は重大な警鐘です。佐田岬半島は地滑り多発地帯であり、半島中心を走る国道197号線は、八幡浜から三崎までの40km足らずの間に20のトンネル、32の橋梁があり、能登半島以上に避難経路の脆弱さが危惧されます。

2月26日15時24分頃には大洲市長浜の肱川東岸の河口付近を震源とする震度4の地震がありました。ドンという音と共に強い衝撃があり、この揺れが続くのかと恐怖を感じさせました。震源は北緯33.6度、東経132.5度で、伊方原発からの水平距離は21.28km。深さは50km。震源と原発の距離は54.3km程と見られます。これがもし、浅い震源で、伊方原発の北6kmを走る中央構造線活断層帯の関係であったとすれば、恐ろしい結果に至ったのではないのでしょうか。

ついては、以下の1点を請願します。

【請願事項】

○能登半島地震は原発の危険を鮮明にしており、伊方原発の運転停止と廃炉を国及び四国電力に求めること。